

研究ノート

## 中国南京市市民の観光行動に関する分析

Geographical Analysis on the Inhabitants' Tourism Behavior in Nanjing, China

杜 国慶\*  
Guoqing DU

**Abstract:** With the remarkable economic development in the eastern coastal areas, diversification especially the spatial difference has been generated as a result of popularization of tourism. Based on a questionnaire survey, this research is aimed to investigate the spatial characteristics of tourism in China by analyzing the inhabitants' tourism behavior in Nanjing.

**Keywords:** 市民 (inhabitant)、空間構造 (spatial structure)、観光圏 (tourism area)、南京 (Nanjing)

### 1. 研究背景と目的

日本の観光行動に関する研究は、早くから行われてきた（小池, 1960；高橋・高林, 1978；落合, 1987, 1991, 1993, 1999；若生ほか, 2001）。外国において、観光地理学の研究も日本と同じく観光地域の形成が主体であり、観光者の行動に関する分析は、極めて少ない（Burneet, 1976；Louviere, 1981）。

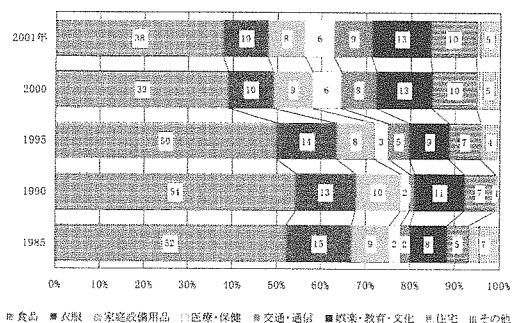
国民生活に定着してきた観光・余暇活動は、生活行動の重要な一環であり、生活行動の空間パターンを地理学的において重要な構成要素になっているともいえる（高橋, 1990）。

中国では、近年の経済成長に伴い、国民の生活行動も大きく変容しつつある。可処分所得の上昇により、観光行動の一般大衆化が進行している。観光行動の大衆化に伴い、観光行動の多様化による空間的な差異が発生していることが推測できる。このような変化は、統計にも反映されている（湯・潘, 2002）。加えて、国民の観光活動に関する研究も多側面において展開されてきた（張ほか, 1999a；張ほか, 1999b；吳,

1997；李ほか, 2001；米・鮑, 2001；蒙, 2001）。ただし、中国における観光行動に見られる空間的特性はこれまで十分に解明されているとは言えない。

統計データによると、中国都市住民一人当たりの平均年間収入額は1985年に僅か748.92元であるものの、2001年には9倍強の6907.08元まで急増した。都市住民一人当たりの年間平均消費額も1985年の673.20元から2001年の5309.01元、約7.9倍まで上昇してきた。経済力の総額だけではなく、消費内容にも大きな変化が現れた。第1図で示すように、消費額における「食品」と「衣服」の割合がそれぞれ1985年の52.3%と14.6%から、2001年の37.9%と10.1%に減少したことは、都市住民の生活レベル上昇することを意味していると理解すれば、「交通・通信」と「娯楽・教育・文化」が2.1%と8.1%から8.6%と13.0%へ上昇したことは、都市住民の生活パターンに著しく変化が起こったと推測できる。特に、「交通・通信」と「娯楽・教育・文化」は旅行とレクリエーションとの緊密な関わりを持ち、観光が都市住民の生活において重要な位置づけになったと考えられる。

\* 立教大学観光学部講師



第1図 中国における都市住民の一人当たり消費額の構成  
(中華人民共和国国家統計局, 2002より作成)

南京市は553.04万の人口(2001年末)を有し、江蘇省の省都である。中国の最大の都市上海まで鉄道距離で305kmである。東部沿海地域に位置する江蘇省は、中国では早くから経済発展を遂げた地域である。国内総生産は1998年が7199.95億元、2001年が9511.91億元で、広東省を次いで第2位を占める(中華人民共和国国家統計局, 2002)。

南京以東の長江三角洲には、揚州、鎮江、無錫、蘇州、南通、上海、杭州など数多く山水文化と地方風情に富んだ名高い観光地が数多く存在する。経済レベルに比例して、2001年江蘇省の旅行会社数が772社、旅行会社従業員数が11,692人で、それぞれ山東省と広東省に次ぐ第2位となる。星付きホテル数は広東省の640軒と浙江省の610軒に次いで、565軒と全国の第3位を占める。このような観光資源と観光産業基盤は、地域の住民の生活行動に関連すると推測できる。

著者は、南京市在住大学生を対象として、アンケート調査に基づいて、観光行動の空間的特性を解明した(杜・溝尾・張、2003)。ただし、対象者の属性を大学生としたため、一般的な国民の観光行動を直接論ずることは困難である。そこで、本研究は、一般市民を対象とし、中国における観光行動の一般的特性を考察することを目的とする。特に、大学生観光行動との比較に重点を置く。

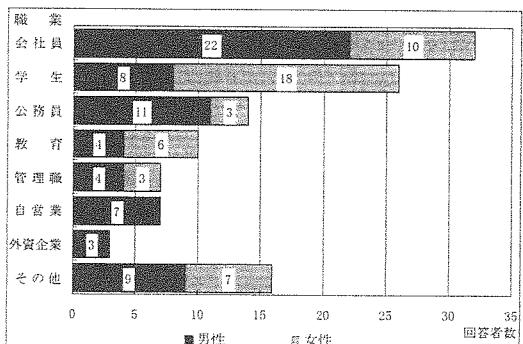
## 2. 回答者の属性

2003年4月に、南京市において一般市民を対象としてアンケート調査を行った。150部のアンケートを配布した結果、回収部数が118部で、有効回答が115部で、有効回答率が76.7%であった。本アンケート調査は、国内観光と海外観光と2つの内容から構成され、

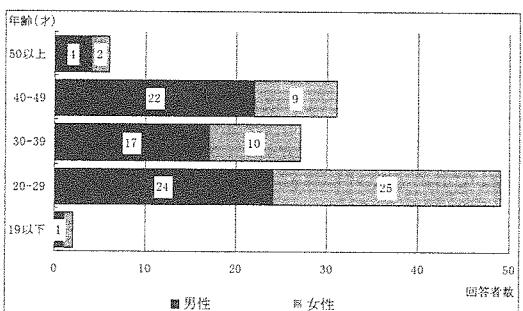
回答者の過去1年間(2002年5月～2003年4月)に実施したすべての観光行動を月単位で調べたものである。回答者115人において、観光件数が382件で、うち海外観光が11名、計17件であり、回答者の9.6%と旅行件数の4.5%の割合となる。

回答者の職業構成から見ると、学生が27名もいる。前回の大学生観光行動の調査と重複する可能性が予想されるが、旅行時期と目的地を見ると、実家所在地と一致するものが僅かであることが判明した。職業は6種にまとめ、各職業の男女別回答者数を示すのが第2図である。職業別の性別構成には顕著な違いが存在する。自営業と外資企業の場合は、すべて男性である。会社員と公務員においては、男性が女性より多い傾向を示す。管理職とその他は、男女がほぼ均等になるが、教育と学生は女性が男性を大きく上回る。

今回の市民回答者は、年齢が17歳から65歳までである。最も多いのは20代の49人で、回答者総数の42.6%を占めている(第3図)。うち男性と女性がそれぞれ25名と24名であり、性別による差異が見られない。19歳以下と50歳以上の回答者が総数の1.7%と



第2図 職業別回答者数



第3図 年齢別回答者数

5.2%を占め、観光客の中ではかなり少數な年齢階層であると判断できる。30代と40代は23.5%と27.0%の割合をもち、20代とともに観光客の重要な年齢層となっている。

## 2. 観光回数と時期

第4図で示すのは、南京市民の年間観光回数別の回答者数である。回答者115名において、合計382回の観光が行われた。そのうち、国内宿泊観光が303回、国内日帰り観光が62回、海外観光が17回がある。観光回数の合計値を見ると、回答者が最も多いのは年間2回観光する人である。その次は、年間3回も4回も同じく回答者が24人である。年間1回のが14人で、5回のが15人であるため、2~3回を中心とする正態分布を呈していると分かった。しかし、観光類型別に見ると、回数別の回答者数の分布が異なるパターンを呈している。まず、国内宿泊観光は2回の回答者数が最多であり、観光回数の合計値とよく似ている分布を示す。国内日帰り観光と海外観光は、1回の回答者数が最も多く、回数が増加するとともに回答者数が減少す

る分布となっている。

観光時期別の観光件数(第5図)を考察してみると、市民と大学生の観光行動とは著しく異なることが分かった。大学生の観光行動は、国の法定休暇より、夏季と冬季の休暇から大きな影響が与えられる(杜・溝尾・張、2003)。しかし、市民の観光行動、特に宿泊観光は、国の法定休暇が最大の要因となる。近年、国内の消費および需要を拡大させるため、春節(旧正月、1月下旬又は2月上旬の3日間)、そして天候の良好なメーデー(5月1日~3日)および国慶節(建国記念日、10月1日~3日)について、前後の土・日曜日とその間の2日を休日として、連続1週間の休暇が取れるようにしている(劉、2001)。図示の通り、国内宿泊観光は、春節休暇のある2月が47件、メーデーの5月が53件、国慶節の10月の59件を有し、年間を通して3つの最大値を示す。したがって、市民の時期別観光行動は、大学生の観光行動より単純なパターンを呈していると言えよう。ただし、いずれにしても、中国においては法定休暇が国民の観光行動を影響する要因であることを判明した。

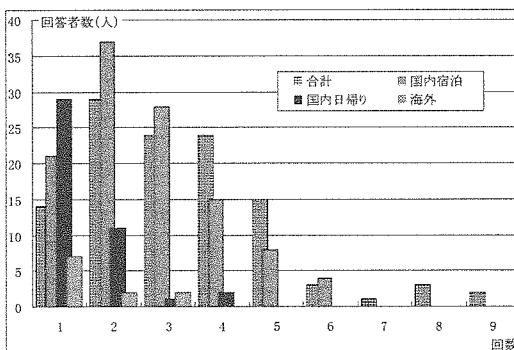
市民の日帰り観光については、国の法定休暇との関連性も現れているが、3月と7月、9月も多い観光件数が存在することから、季節とくに自然風景の観賞が日帰りの重要な内容になることが分かった。

## 3. 観光目的と活動内容

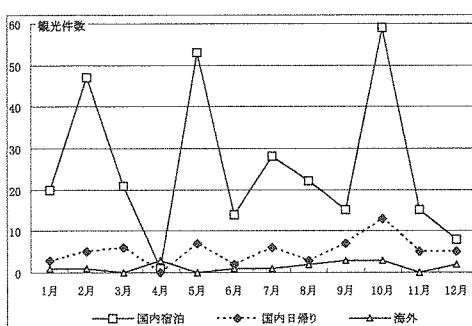
市民の観光において、様々な目的が存在する。本章は、観光の目的から市民観光行動を類型化し、各種観光の特徴を探る。ここでは、観光の主要な目的をレクリエーション、親族訪問、自然・名所見学、趣味・研究、避暑・避寒、博覧会、出張、その他の8種に分けて、市民の観光行動を考察する(第6図)。

まず、レクリエーションを目的とする観光が127件で、総数の34.8%を占める最も多い観光行動である。大学生の観光行動においては、帰省と伴う観光が最も多く、レクリエーション観光が第2位となる。大学生が実家から離れているという空間状況を除いて考えれば、レクリエーション観光が中国においては主要な観光形態と考えられる。

次いで、自然・名所見学と親族訪問を目的とする観光が、それぞれ71件と63件で、総件数の19.5%と17.3%を占める。大学生の観光行動と異なるもう1つの特徴は、親族訪問を目的とする観光が大学生より高



第4図 観光回数別回答者数



第5図 月別観光件数

い割合を占めることである。

各目的の宿泊観光と日帰り観光の構成においても、市民と大学生が異なる傾向を示す。大学生と比べれば、市民の観光行動には、宿泊観光が日帰り観光より高い割合を有する。レクリエーションと親族訪問、自然・名所見学において、大学生の宿泊観光の割合がそれぞれ43.9%と74.5%、39.7%であることに対して、市民の宿泊観光の割合は74.0%と87.1%、87.3%と高い割合を有する。それは市民と大学生の経済力の格差に原因が存在すると考えられる。

市民の観光行動における活動内容を考察するのは、第1表である。見物・観賞、体験、移動、運動の4大分類の構成は、大学生の観光行動ともほぼ一致する。しかし、見物・観賞と移動は、大学生の観光行動には

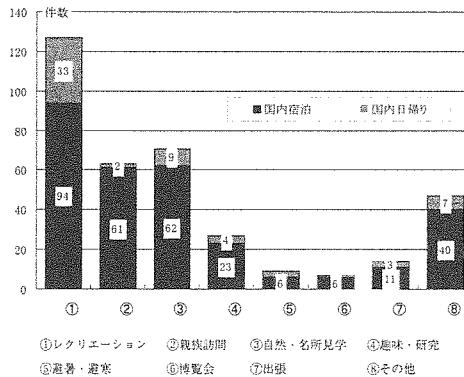
64.9%と11.1%を占め、市民の観光行動には59.7%と6.6%と比較的に低い割合を占める。対照的に、体験と運動は、市民の観光行動には18.9%と6.5%を占め、大学生の観光行動における15.9%と3.5%と高い割合を占める。市民観光行動と大学生観光行動の行動内容の違いが分かった。

#### 4. 観光行動の空間構造

大学生の観光行動には、南京から350kmの学期期間中の実習主目的型観光圏と1200kmの連休を利用する自主的観光圏、そして1900kmの夏・冬休みを利用する帰省型観光圏が存在することが解明されたが、市民観光行動の空間構造においては、明確な圏域構造が存在しないことが、第7図と第8図で分かった。

日帰り観光は、主に江蘇省内に分布し、省外は上海と浙江省の杭州、安徽省の徽州にしか存在しない。日帰り観光の最も多い南京市内は26件もあり、次ぎは揚州と上海、杭州も同じく6件がある。大学生の日帰り観光行動と比較すれば、目的地が少なく、圏域が狭いのが特徴である。

宿泊観光においては、北京が最大の観光件数をもつ目的地であり、その次は蘇州（24件）と杭州（24件）、上海（21件）で、他に10件以上をする目的地は黃山（17件）と揚州（10件）、南京（10件）がある。大学生の南京と上海に集中する空間構造とは著しく異なる。北京の豊かな観光資源と首都の中心機能が主な原因と考えられる。大学生の観光行動には、距離の摩

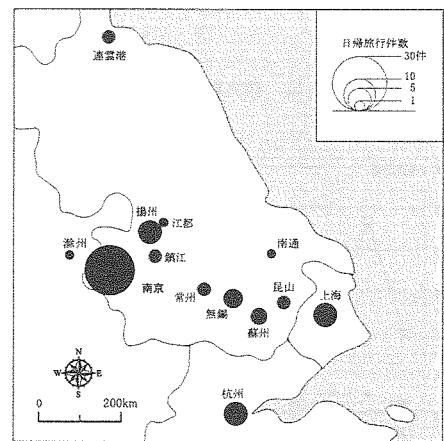


第6図 目的別観光件数

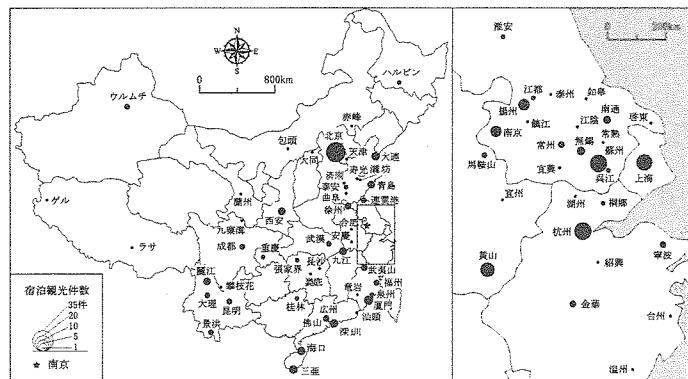
第1表 南京市市民の観光行動における活動内容の構成

活動内容	国内宿泊観光		合計
	件数	%	
1. 本郷の風景を見る	36 (2.6)	14 (1.7)	51 (3.3)
2. 自然の風景を見る	174 (15.2)	29 (3.5)	203 (15.3)
3. 老舗・古跡を見る	158 (13.2)	23 (2.8)	175 (13.1)
4. 神社・寺を見る	47 (4.1)	9 (1.0)	56 (4.2)
5. 飲食	153 (13.1)	19 (2.0)	162 (12.7)
6. 游泳・海水・スキーなどの観賞	19 (1.6)	4 (0.4)	23 (1.7)
7. 動植物園、水族館、博物館、美術館見学	83 (7.7)	9 (1.0)	97 (7.3)
8. 博覧会	23 (2.0)	4 (0.4)	27 (2.0)
9. 産業地	35 (3.1)	9 (1.0)	44 (3.3)
10. 食	3 (0.3)	1 (0.3)	4 (0.3)
11. 織工狩り、果物狩りなど	12 (1.0)	1 (0.3)	13 (1.0)
12. utsch・研究	41 (3.6)	8 (0.9)	52 (3.9)
13. 飲食	113 (9.9)	18 (2.0)	131 (9.9)
14. 民芸品作り	10 (0.9)	0 (0.0)	10 (0.8)
15. 登山ハイキング	52 (4.6)	9 (1.0)	61 (4.7)
16. ピクニック	6 (0.5)	2 (1.0)	8 (0.6)
17. キャンプ	6 (0.5)	1 (0.5)	7 (0.6)
18. ドライブ	10 (0.9)	3 (1.0)	13 (1.0)
19. 海水浴	17 (1.5)	2 (1.1)	19 (1.4)
20. 木泳(樹・プール)	13 (1.1)	3 (1.6)	16 (1.2)
21. ラトベーブート・ビング・オーバン	19 (1.7)	1 (0.5)	20 (1.5)
22. スキー	4 (0.3)	0 (0.0)	4 (0.3)
23. アイスクート	4 (0.3)	0 (0.0)	4 (0.3)
24. ゴルフ	9 (0.8)	0 (0.0)	9 (0.8)
25. ゴルフ	4 (0.3)	0 (0.0)	4 (0.3)
26. その他(スキー)	7 (0.6)	1 (0.5)	8 (0.6)
27. その他(スキー)	74 (6.5)	7 (3.6)	81 (6.1)
その他 不明	95 (8.3)	12 (1.6)	107 (8.1)
合計	1144 (100)	162 (100)	1306 (100)

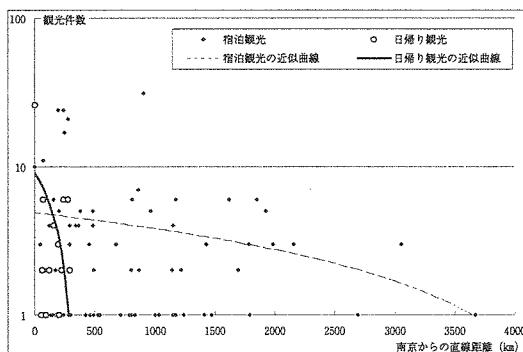
注:括弧のうちの数字が割合(%)を示す。



第7図 南京市民日帰り観光の空間分布



第8図 南京市市民の宿泊観光の空間分布



第9図 類型別観光件数と距離との関係

擦効果が主な要因となったが、市民の観光行動には、その影響が小さい。特に観光件数が6件をもつ海口と三亞、深圳、無錫、大連、5件をもつ麗江と九江、南通、青島、西安、4件をもつ広州と徐州、常州、武夷山、金華、寧波は、同じ件数をもつても関わらず、南京からの距離がかなり異なる。このような特徴は第9図が明示している。

## [参考文献]

- Burnett, P. (1976) : Toward dynamic models of traveler behavior and point patterns of traveler origins. *Economic Geography*, 52, pp. 30-47.
- 小池洋一 (1960) : 都市住民のレクリエーション形態とその地域的関係. *地理学評論*, 33, pp. 615-625.
- 李山・蒋軒紅・吳兵・楊曉曦 (2001) : 中国城市居民旅游感受空间研究. *旅游学刊*, 16(1), 22-26.
- 劉明 (2001) : 中日観光交流の新展開—中国人訪日観光の現況と規制緩和について—. 日本観光研究学会第16回全国大会論文集, pp. 165-168.
- Louviere, J. J. (1981) : A conceptual and analytical framework for understanding spatial and travel choice. *Economic Geography*, 57, pp. 304-314.
- 蒙睿 (2001) : 我国青少年旅游网络建构的初步探讨. *旅游学刊*, 16(1), pp. 47-50.
- 米紅・鮑静 (2001) : 中国城市「一日游」分析モデル構建及其実証研究. *旅游学刊*, 16(5), pp. 75-77.
- 落合康弘 (1987) : 静岡県中部地区における週末型余暇活動の地域的展開. *地理誌叢*, 29(1), pp. 31-42.
- 落合康弘 (1991) : 神奈川県中西部における余暇活動の空間的展開. *経済地理学年報*, 37, pp. 245-265.
- 落合康弘 (1993) : 東京都区部地域における住民の週末余暇活動パターン. *地理誌叢*, 34(2), pp. 32-47.
- 落合康弘 (1999) : 首都圏に居住する大学生の非日常的な外出レジャー行動の空間パターン. *日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要*, 34, pp. 61-72.
- 高橋伸夫編 (1990) : 日本の生活空間. 古今書院, 260p.
- 高橋伸夫・高林清和 (1978) : 浜松市における余暇圈の構造. *人文地理学研究*, 2, pp. 95-108.
- 湯槿・潘丹 (2002) : 統計数字からみる中国の観光事業の一侧面. *立教観光学研究紀要*, 4, pp. 87-92.
- 杜國慶・溝尾義隆・張京祥 (2003) : 中国南京市居住大学生の観光行動に関する地理学的分析. *立教大学観光学部紀要*, 5, pp. 83-96.
- 若生広子・高橋伸夫・松井圭介 (2001) : ライフステージからみた女性の観光行動における空間的特性—仙台市北部住宅地の居住女性を事例として—. *新地理*, 49(3), pp. 12-33.
- 吳必虎・唐俊雅・黃安民・趙榮・邱扶東・方芳 (1997) : 中国城市居民旅游目的地選択行為研究. *地理学報*, 52(2), pp. 97-103.
- 張捷・都金康・周寅康・張思彦・蔣兆剛 (1999a) : 観光旅游地客流時間分布特性的比較研究—以九塞溝、黃山及福建永安桃源洞鱗隱石林國家風景名勝区为例—. *地理科学*, 19(1), pp. 49-54.
- 張捷・都金康・周寅康・張思彦・潘冰 (1999b) : 自然観光旅游地客源市場の空間結構研究—以九塞溝比較風景区为例—. *地理学報*, 54(4), pp. 357-364.
- 中華人民共和国国家統計局 (2002) : 中国統計年鑑 2002. 北京: 中国統計出版社.